

研究主題「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業」(1年次)

新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を授業でどう実現? 附属新潟中は真っ向からこの課題に挑戦します! 一緒に明日からの授業を考えませんか?

今年度、「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業」(1年次)を研究主題に掲げました。附属新潟中式3つの重点「意味ある文脈での課題設定」「対話を促す工夫」「学びの再構成を促す工夫」を基にした働き掛けによって、生徒一人一人の「見方・考え方」を働かせることを促します。そして、生徒が資質・能力を発揮することを繰り返し経験することで、自らの学びをどのように自覚していくのかに研究の焦点を当てます。生徒が確かな学びに向かうには、物事をとらえる視点や考え方である「見方・考え方」の両面から、自らの学びを自覚することが大切です。

自らの「見方・考え方」を自覚するためには、その有用性に着目するきっかけが不可欠です。そのきっかけとなるのが、仲間とのかかわりです。一人一人の「見方・考え方」の違いに気付く、新たな考えを見いだすことです。授業では、課題を解決するために、仲間とのかかわりの中で教科等の「見方・考え方」を働かせて、学習内容と実社会、実生活、自分の生活とのつながり、現実の問題解決の方法とのつながりを実感できる授業を構想します。生徒が仲間と課題を共有し、その解決に向けて、一人一人の考えの違いを尊重し、多様な考えを比べ、関係付けながらよりよい見方・考え方を創り出した実感がともなったときに、生徒同士のかかわりに対話が促されると考えます。

[対話が成立する要件]

- 「見方・考え方」を働かせて、自分の考えをもっている。
- 相手に「見方・考え方」を「伝えたい」、そして「わかってほしい」思いがある
- 「見方・考え方」の違いを乗り越える新しい考えを互いの努力で見つけ出そうとする
- 自己内対話がある(モニタリングとコントロール)
- 互いの考えが高められ、よりよいものへと変容した実感がある
- 互いの考え方の違いを認めようとする集団の支持的風土がある

対話の中で、生徒が確かな学びに向かうように、「意味ある文脈での課題設定」「対話を促す工夫」「学びの再構成を促す工夫」の3つの重点から授業を構想します。

(右の実践例は、昨年度の教育研究発表会で行った実践です。今後、今年度の実践で具体を紹介していきます。)

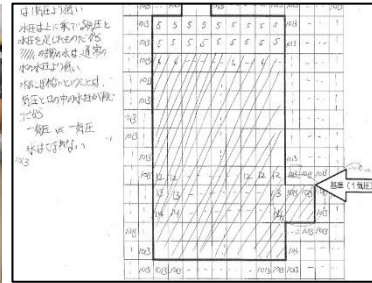
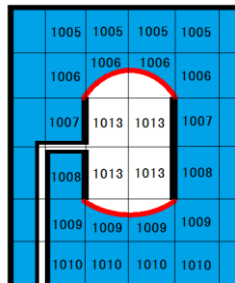


「思考のすべ」から「見方・考え方」へ—新学習指導要領「主体的・対話的で深い学び」のキーワード!!

前次研究では、思考に着目した研究を行ってきました。「学ぶ喜び」を実感・納得する中で、生徒が自分にとって意味あるものと価値付けた思考操作・学習方略・情意・態度等を「思考のすべ」と定義し、「思考のすべ」の育成から、教科・領域等を横断して汎用的に用いる資質・能力の育成を図りました。前次研究の改善すべき点として、生徒の「思考のすべ」を分析した結果から「複数のものを比べる思考」「様々な視点から関係付ける思考」「様々な規則にそってまとめる思考」など、思考操作は理解しているものの、目的に応じて、どのような視点や関係などで捉えるかという見方が明確になっていないものがありました。物事をとらえる視点や考え方である「見方・考え方」の両面から、生徒が自らの学びを自覚していく授業を構想する必要性が明らかになりました。

「見方・考え方」を働かせた確かな学びへ—「見方・考え方」を働かせて、学びが繋がっていく自覚を重視!!

例として、1学年、理科の水圧の授業では、水面よりも高い位置の水中の水圧と大気圧との関係を考えることで深まった水中での圧力の認識を基に、日常事象の「ふれあい水槽」で水がこぼれないことを明らかにすることを追究しました。基準水面や基準水面からの距離、そして水中での水圧と大気圧の押し合いの目で見えない量的な関係を格子状で捉えることに着目し、水面よりも高い位置のゴム膜の変化の様子を低い位置のゴム膜の変化の結果と比較したり、関係付けたりする見方・考え方を身に付けていきました。そして、単元のまとめとして、日常事象である「ふれあい水槽」のしくみを追究する活動を設定することで、生徒は単元で身に付けた「見方・考え方」を働かせて、水圧という科学的概念と日常事象とのつながりの奥深さを自覚することができました。



【水圧を格子状で捉える】 【自分たちで実験方法を追究する生徒】 【日常事象「ふれあい水槽」のしくみの解明】

このように、生徒が教科等における「見方・考え方」を働かせた姿を、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力等」の資質・能力を発揮した姿と捉えます。価値ある学びの中で、「見方・考え方」を働かせて、学んだことと実社会や実生活とのつながりを実感することを経験していく中で、「見方・考え方」は生徒の教科横断的で汎用的な力である資質・能力を育むことにつながります。さらに、資質・能力が育まれることによって、生徒の「見方・考え方」は高まり、生徒は確かな学びへと向かっていきます。

意味ある文脈での課題設定

なぜ、「意味ある文脈」?

生徒が「見方・考え方」を働かせて、授業での学びを実社会、実生活等とのつながりの中で再構成するために、単元や題材の到達目標に向けて生徒の実態に応じて、教材を適切に選択、組織し、生徒が教科の本質に迫る課題を見いだせるようにします。

生徒が既知知識・経験を基に、事象、しくみ、状況等を自分ごととして捉える状況を設定し、生徒の既知知識・経験から生じる疑問などの問題意識を喚起させ、目的意識を醸成させるために、学ぶ必要性や学ぶ意義を自覚していく意味ある文脈を大切にします。生徒の目的意識を大切に、学習内容と生徒のこれまでの既知知識・経験が合わさり、1つのストーリーとなるような単元・題材を構想します。



美術科(2年生)

当校の創立70周年ロゴマークを構想する題材構成としました。生徒は日常使われているロゴマークからロゴマークの形や色彩に込められた意味や由来などをまとめ、象徴性や印象付けなどロゴマークの役割について理解し、当校の歴史、背景などと関係付けながら70周年ロゴマークを構想しました。

対話を促す工夫

なぜ、対話?

生徒が互いの考えの根拠や考えに至った過程などを共有し、自分と他者の考えが相互に価値のあるものになったり、自分の考えを見直し、自己理解を深めることにもつながりするようにします。

同じ目的、観点、論点などを基に、生徒が課題に対する考えを確かな根拠を基に伝え合い、他者の「見方・考え方」から考え直したりしながら、互いの考えを形成できるように他者との対話を促します。また、生徒が自らの考えを「自分はどのような視点で、どのように考えているのか」と振り返り(モニタリング)、「次はこのように視点で捉えて、このように考えてみよう」と調整(コントロール)できるように自己との対話を促します。



英語科(3年生)

ALTに「観光スポットガイドコース」を提案するために、グループで内容を議論する編集会議を中心とした教材構成としたことで、生徒が何のために英語で議論をするのか目的を明確にしました。「相手の考えが理解できない際に、自分の考えを言い換えて表現すること」「相手の考えに賛成するコメントを述べること」「相手からの意見を踏まえて、自分の考えと関係付けてよりよい表現をすること」などモニタリングとコントロールを促し、議論を深めるために、生徒それぞれの考えの相違点などの議論のやりとりをホワイトボードに視覚化しました。

学びの再構成を促す工夫

なぜ、学びの再構成?

生徒が課題解決に至るまでに身に付けた「見方・考え方」を教科等の言葉と関係付けながら、その有用性に着目したり、意識的に用いたりできるようにします。身に付けた「見方・考え方」を働かせて、学習内容が社会参画、実生活の事象、自分の生活、現実の問題解決の方法などと、どのようなつながりがあるのかを、問い直す働き掛けをします。身に付けた「見方・考え方」を働かせて、単元・題材の学習内容を学ぶことの意味、価値、有用性を自覚していくことで、生徒は学びを再構成し、確かな学びに向かっていきます。



技術・家庭科 技術分野(1年生)

生活に役立つ製品を設計するために、使用目的、使用条件等を明確にした題材構成としました。発砲ボードを活用した実物大試作の製作活動を通して、留め紐ぎや組み紐ぎといった伝統技術を施した技術とその効果の関係性に着目した「見方・考え方」を働かせて、伝統技術とものづくりのつながりの意味を自覚していききました。